

1393 はミニチュア壺である。超小形で内部に指が入らない頸部径である。1394～1402・1418 は甕である。胴部形態はやや肩が張る器形を呈し、底部は平底若しくは尖り底である。1403～1406 の口縁部が外反する大形鉢はすべて端部を面取りする。1403・1405・1406 は角閃石細粒を含む胎土の丹塗土器で備中系土器である。1409～1414 の小形直口鉢は底部が尖り底のものが多く、1407 のように丸底のものも口縁端部は丁寧に面取りしており、古い属性を残す。なお、1418 の甕は焼成前の穿孔である。これらは後期後半新段階に属す。

S151 はサヌカイト製打製石鏃である。S152 は安山岩板材の分割片の一面に細い線刻を認める個体である。線刻は先端鋭い工具で施され、通常砥石表面に散見される傷溝にも類似する。その機能や目的は不明である。T46・T47 は碧玉製管玉である。T46 は直径 2.1mm と細く、折損するが全長は 10mm に満たないと考えられる。T59 に類似しており、鉄針による穿孔で片側穿孔の可能性がある。法量としては、大賀分類の東日本系 Se 群に相当し、後期の北陸地域で製作された可能性がある。焼土層出土。T47 は鉄針による両側穿孔で穿孔軸が上下でややずれる。直径 3mm で長さが 12.5mm と細長い形態である。焼土層出土。T48 は土製丸玉である。

M65 は完形の鉄錐である。上端に段をもち、直径 10mm の本体上端から下端作用部にかけて直線的に細くなる。最下端は X 線写真で若干の摩耗が見られる。E3 グリッドの焼土層で出土した。

以上の出土遺物より、建物の廃絶時期は後期後半新段階と考えられる。

#### (77) SH4143a

4 区中央やや西よりで検出した円形の堅穴建物である。直径 4.5 m ほどの円弧をもつ壁溝が部分的に残り、主柱穴が 6 基 (SP4361a・SP4337a・SP4360a・SP4365a・SP4399a・SP4425a) ある。堀方は極めて浅く、主柱穴列の周囲にベッド状遺構の段を僅かに残す。段下から土器少量と、多くのサヌカイト製石器・剥片が出土した。剥片類は主柱穴列の内側に取まり、ほぼ全体に 5g 以上のやや大きめの剥片が散在し、0.5 g 前後の剥片は土器溜りとともに出土している。

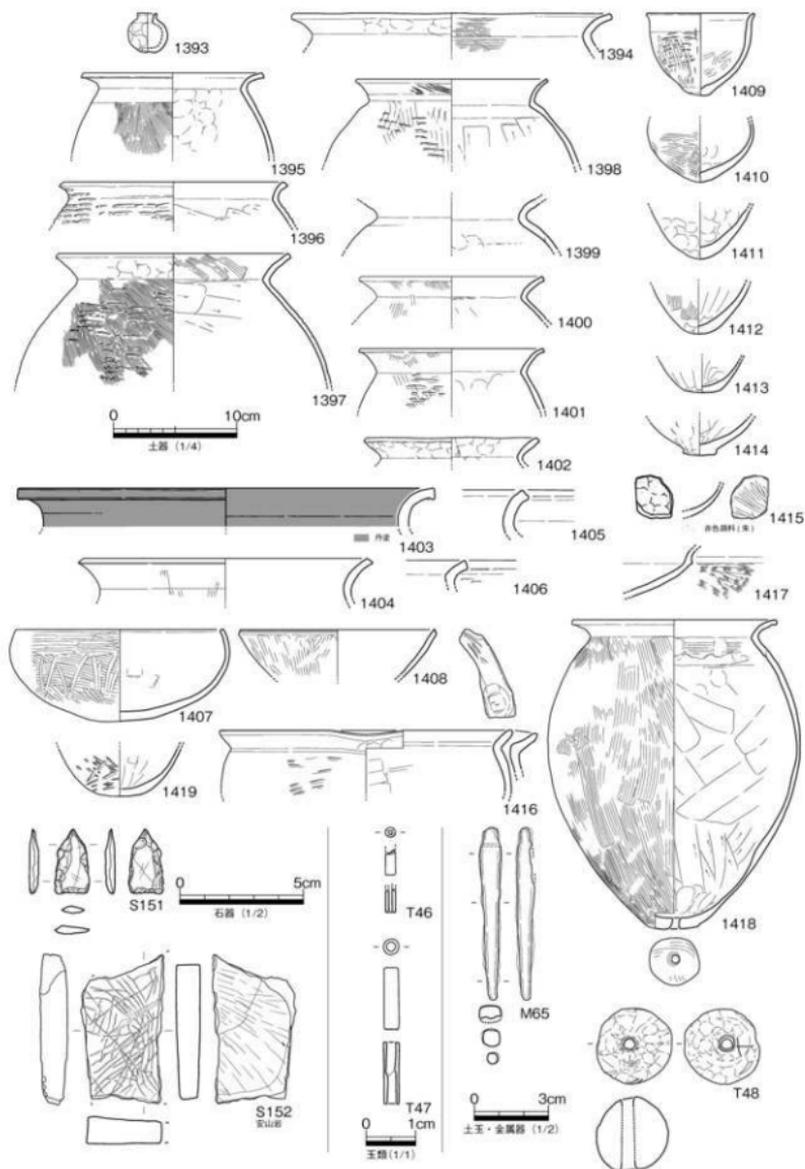
##### <出土遺物>

1420 は口縁拡張が小さい甕口縁。中期の混在品。1421 は口縁内面の稜線が緩く、胴部外面の斜め方向のハケ目が上端付近まで及び、屈曲部際でヨコナデがある。1422 は底縁部の残存状態が悪いが、平底の壺底部と考えられる。これらの土器は後期前半を下限とする。

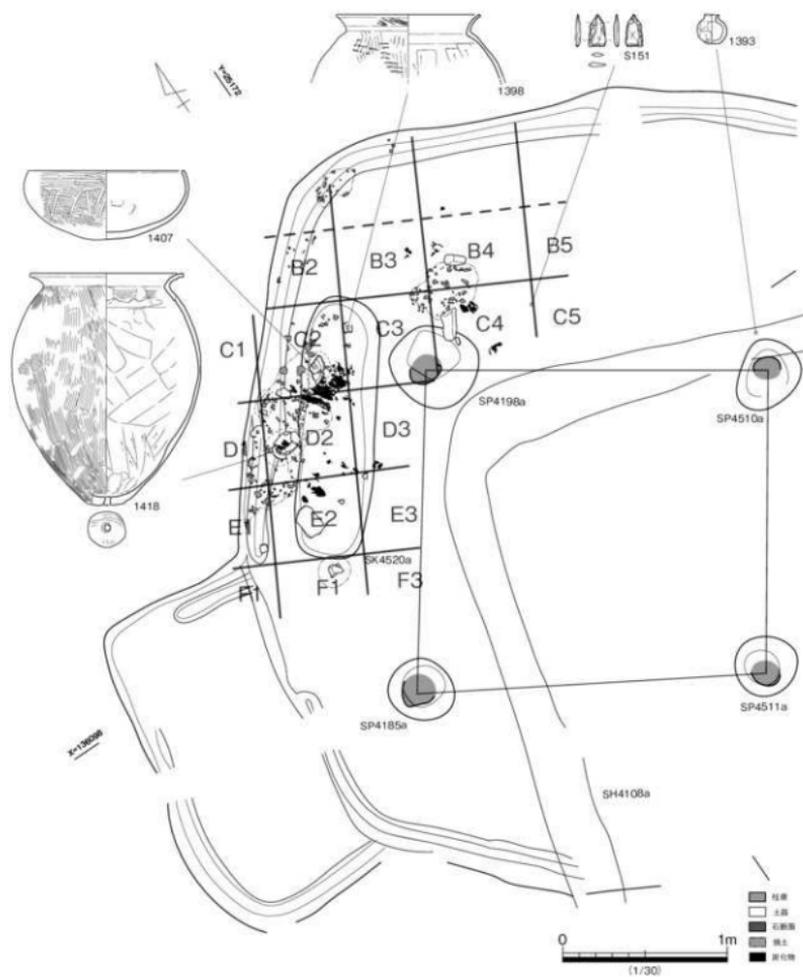
S153～S160 はサヌカイト製打製石鏃である。S157・158 の凹基式と S153・156・159・160 の凸基有茎式がある。いずれも製作途上品が含まれることから、同じ時期に異なる形式の石鏃が製作されている。S163 は打製石剣基部で素材面に磨滅がある。S165 は板状の素材から石鏃の素材になりそうな大きさの剥片を剥取する石核である。

建物の埋没時期は後期前半で、打製石器やその製作に伴う剥片・砕片が多く出土していることからみて、後期前半でも古段階と考えられる。

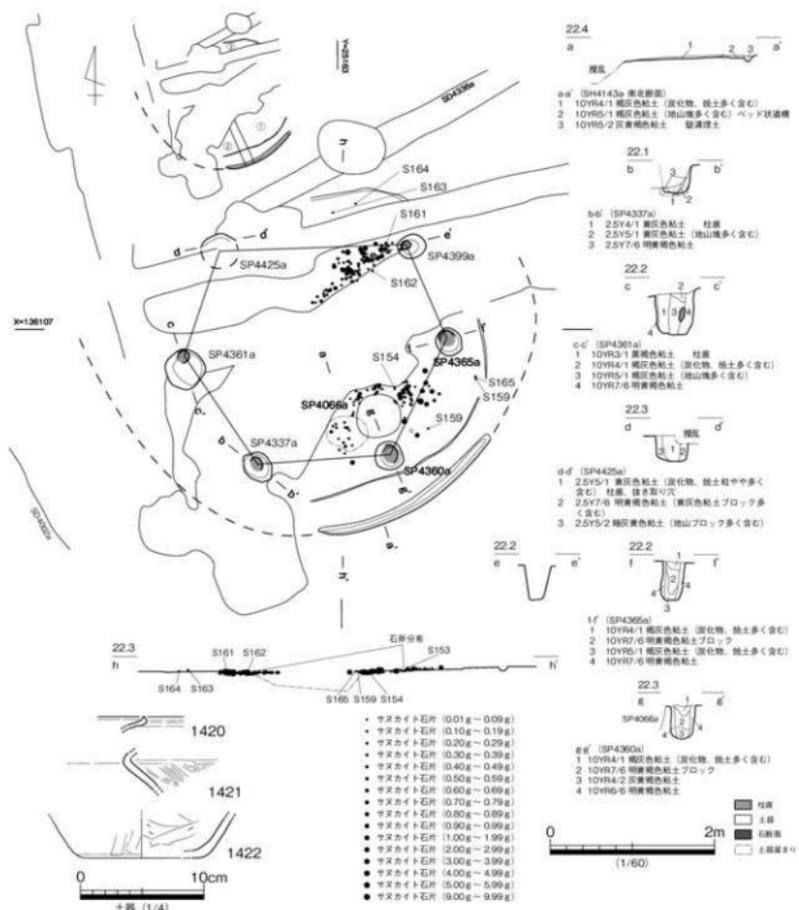
#### (78) SH4160a



第178図 竪穴建物SH4124a出土遺物実測図



第179図 竪穴建物 SH4124a 出土状況図

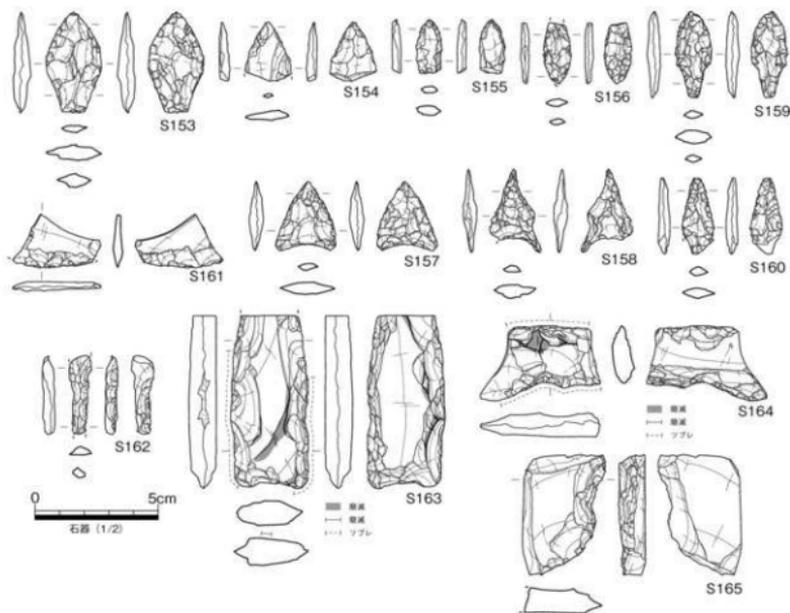


第180図 竪穴建物 SH4143a 平・断面図 出土遺物実測図1

4区中央やや東寄りで検出した多角形の竪穴建物である。推定床面積は30.6㎡。終末期新段階の竪穴建物 SH4161a に切られ、後期前半の竪穴建物 SH4258a を切る。

主柱穴は5基のうち4基 (SP4190a・SP4191a・SP4204a・SP5024) を検出した。主柱穴列の外側に貼床で構築したベッド状遺構がある。床面南側に不定形の土坑 SK4182a がある。土坑底面には帯状の炭化物層があり、コナラの炭化材が同定された (第4章第2節4)。なお、床面中央付近にも土坑 SK5091 がある。埋土下層から床面にかけて土器が多く出土した。

<出土遺物>



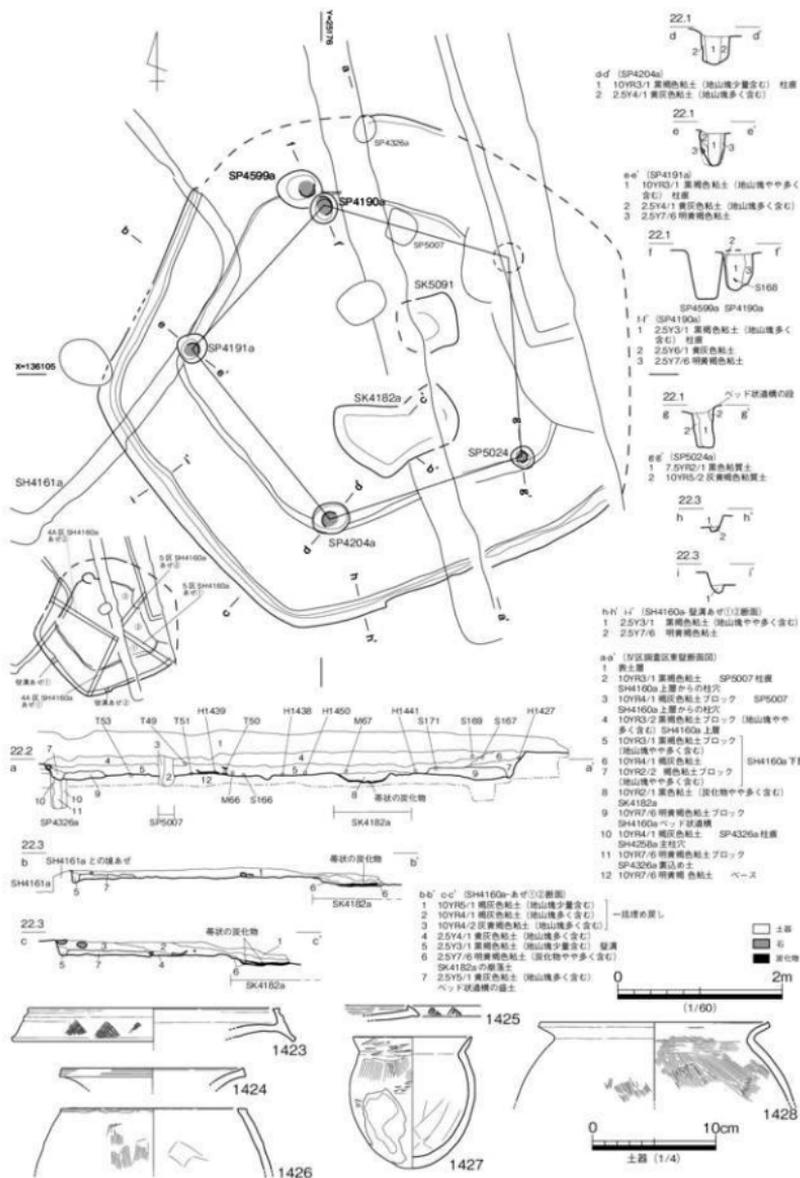
第181図 竪穴建物SH4143a出土遺物実測図2

1423はB2類の鋸歯文を施文する複合口縁の壺若しくは器台である。胎土はH類。1425はA2類の鋸歯文を施文し、器台の可能性もある。1424は口縁部に退化した凹線文を施文する土器で後期前半の混在品。1426は内傾する口縁の無頸壺である。

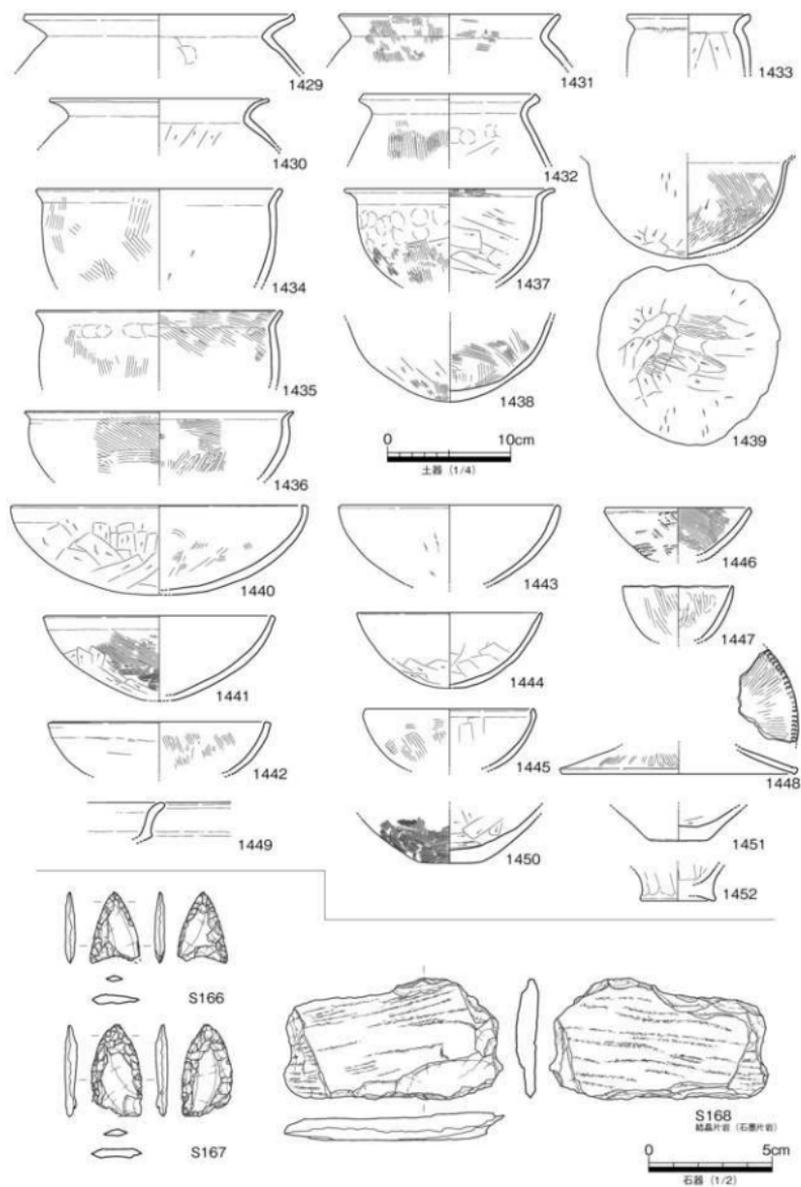
1427は小形の甕で口縁端部が尖り、底部下半に焼成時の破裂痕がある。体部下半の丸みは強くない。1428～1433は口縁部が内面稜線を介して開く甕である。ただ、稜線は緩やかで、外反度も弱い。1429～1431は胎土Hである。1434～1439は口縁部外反の鉢である。1439は体部がボール状に膨らみ終末期に属す。1440～1447は口縁部が肥厚するか面取りする直口鉢。1448は低脚の台付鉢で裾端に半載竹管刺突文を施す。1449は高杯口縁部で短く外反する形態である。底部は平底が多い。以上の土器は終末期の古段階に属すものが多い。

S166・167はサヌカイト製打製石鎌である、凹基式、平基式がある。S170は砂岩製の叩き石で周辺に敲打痕が多い。S169は安山岩製の方柱状の砥石である。研磨は#800程度で極く弱い。S168は灰色の石墨片岩製の打製石庖丁である。刃部は再調整され磨減面はほとんど残らない。S171は砂岩製の叩き石である。面に顕著な窪みが残る。

M66は断面が蒲鉾形状で先端が尖ることから、鉄製のヤリガンナ先端部と判断した。M67は鉄鋸である。先端は片側のみ逆刺が付き身幅も一方が先端に向かって厚みを減じて、先端部を薄く仕上げる。長さは11.5cmではほぼ完形品である。漁具として使用されたものと推察するが、搬入された鉄器素材と



第182図 竪穴建物 SH4160a 平・断面 出土遺物実測図1



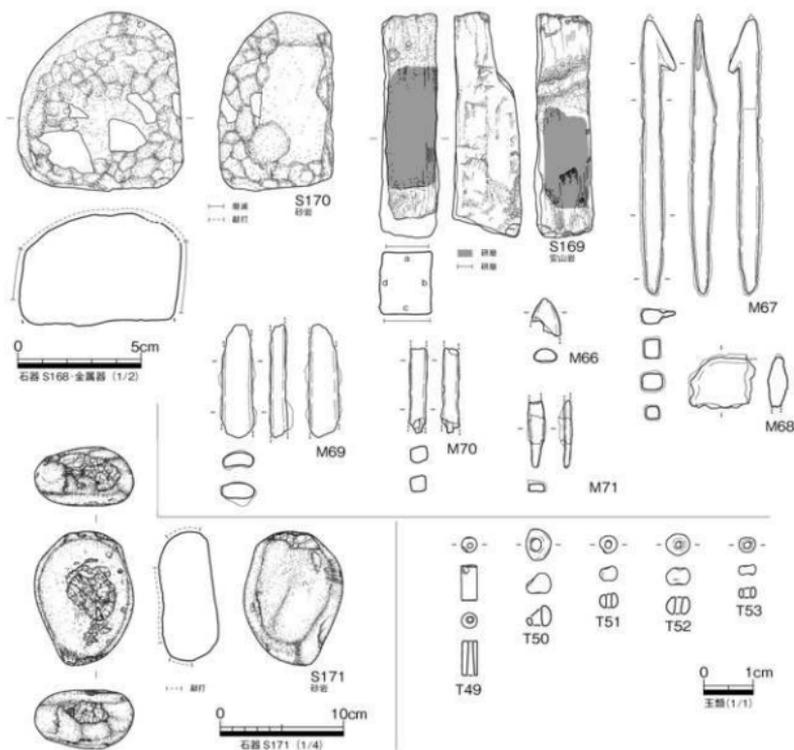
第 183 図 竪穴建物 SH4160a 出土遺物実測図 2

しての見方も可能である。M68 は板状鉄片で右縁以外の破断面は摩耗する。M69 は上半部が裏スキ状となり、ヤリガナノの可能性もある棒状鉄片である。破断面は上下縁とも摩耗する。M70 は断面方形の、M71 は断面扁平方形の鉄釘で、いずれも上層出土の混在品である。

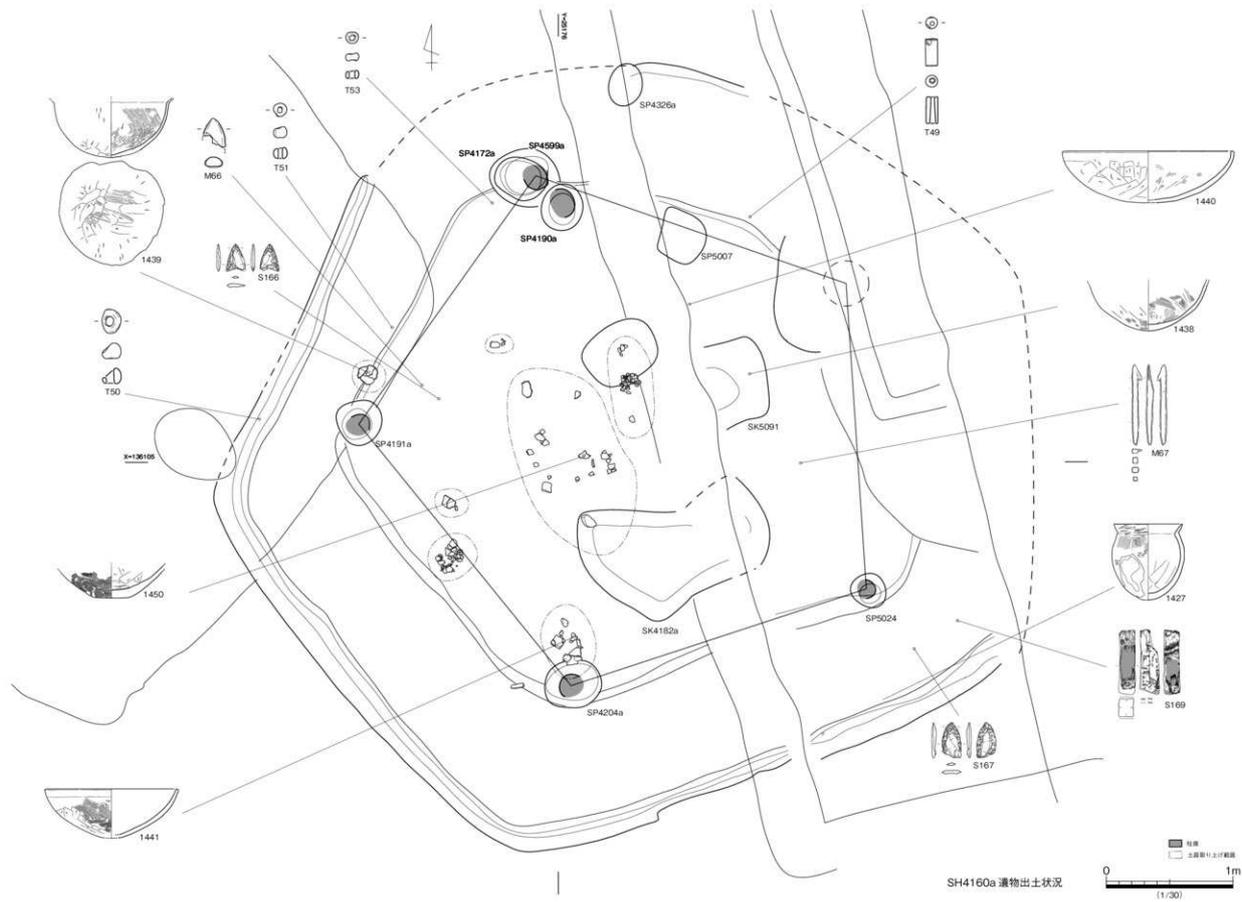
T49 はベッド状遺構上面で出土した碧玉製の管玉である。長さ7mm、直径3.2mmで鉄針により片側から穿孔する。蛍光X線分析ではSiO<sub>2</sub>が78.91%を占めておりパレオ・ラボ竹原氏は碧玉としている(第4章第4節2)が、比重は2.235であることから薬科哲男氏は緑色凝灰岩と判定している(第4章第4節5)。法量区分としては大賀分類の領域Swに入る。薬科氏による原産地分析の結果、何処の原石・遺物群にも信頼限界の確率以上で同定できないことから、今回本遺物で新たな原産地群が設定された(第4章第4節5)。

T50～T53は床面から出土したガラス製小玉である。T50・T51・T53は酸化カリウムを多く含み、銅・錫・鉛を含む青緑色系のカリガラスである。T52は濃紺色を呈し、コバルトにより着色されたカリガラスである。(第4章第4節2)。

以上、出土遺物から本建物は終末期古段階に廃絶したものと判断した。



第184図 竪穴建物SH4160a出土遺物実測図3



第185図 竪穴建物 SH4160a 出土状況図

**(79) SH4161a**

4区中央や北側で出土した方形竪穴建物である。北側でSH4254aに切られ、南側でSH4160a及びSH4258aを切る。

一辺5.1mの隅丸方形で主柱穴は4基が2組あり、少なくとも1回は上部構造の変更を含めた建て替えを行っている。最大領域での床面積は24.0㎡。ベッド状遺構は貼床で構築しており、段部分には間仕切り板を設置するための溝も上下2層で検出した。外周壁の壁溝も外側の壁溝が廃絶時の壁溝で、内側の壁溝は貼床を除去して検出したことから、改築前の建物は一回り小形であったものと判断した。これらより、古期はSP4357a・SP4356a・SP4352a・SP4350aが主柱穴で、新时期はSP4196a・SP4195a・SP4194a・SP4193aが主柱穴であったものと推察する。なお、中央土坑は当初SK4262aを使用し、その後SK4261aを含めた広い範囲の炉跡となり、床面の広範囲に焼土と炭化物が広がることから、段下の床面は大きな変更は見られない。遺物は多くが床面の土器溜りで出土した。

なお、埋土中で出土した炭化材は21.02gで、そのうちサカキ、コナラ属クスギ節、コナラ属コナラ節が同定され、主に中央土坑からは炭化したイネ果実(破片)6・モモ核(破片)13・トチノキ種子(破片)2が出土した(第4章第2節4)。

**<出土遺物>**

1453～1456は床面・下層出土の広口壺で、頸部が斜め上方に傾き、口縁部が緩やかに屈曲して開く形態で口縁端部を拡張しない。1453・1455は胎土H。終末期に属す。

1457は下層出土の複合口縁壺。口縁の下方への突出が顕著で、B2類の鋸歯文を施文する。1458～1460は上層出土の複合口縁壺である。1459は胎土中に黒雲母を多く含む胎土Hを持つ。1458はA2類の鋸歯文を施し、上端に凹線文を施文する吉備系の器台。1459はB2類の鋸歯文を施す。

1461・1465・1463は埋土上層出土の甕である。それ以外の甕は土器溜り出土。外面に叩き目を残すものではなく、口縁部内面の稜線は顕著ではないが、口縁部が斜め上方に発達するものが多い。鉢は口縁部外反の大形鉢、小形鉢が共存する。1482～1488は中形の皿状鉢である。口縁部は面取りするものが多い。小形直口鉢はほとんど組成せず、1491～1494の手づくねで製作した皿状の小形鉢が目立ち、終末期の特徴を備える。1481は弥生前期の混在品。胎土H及び胎土Hbが多い。

S172は凸基Ⅱ式のサヌカイト製打製石鎌である。S173はサヌカイト製の石核である。縄文期の剥片の転用品である。

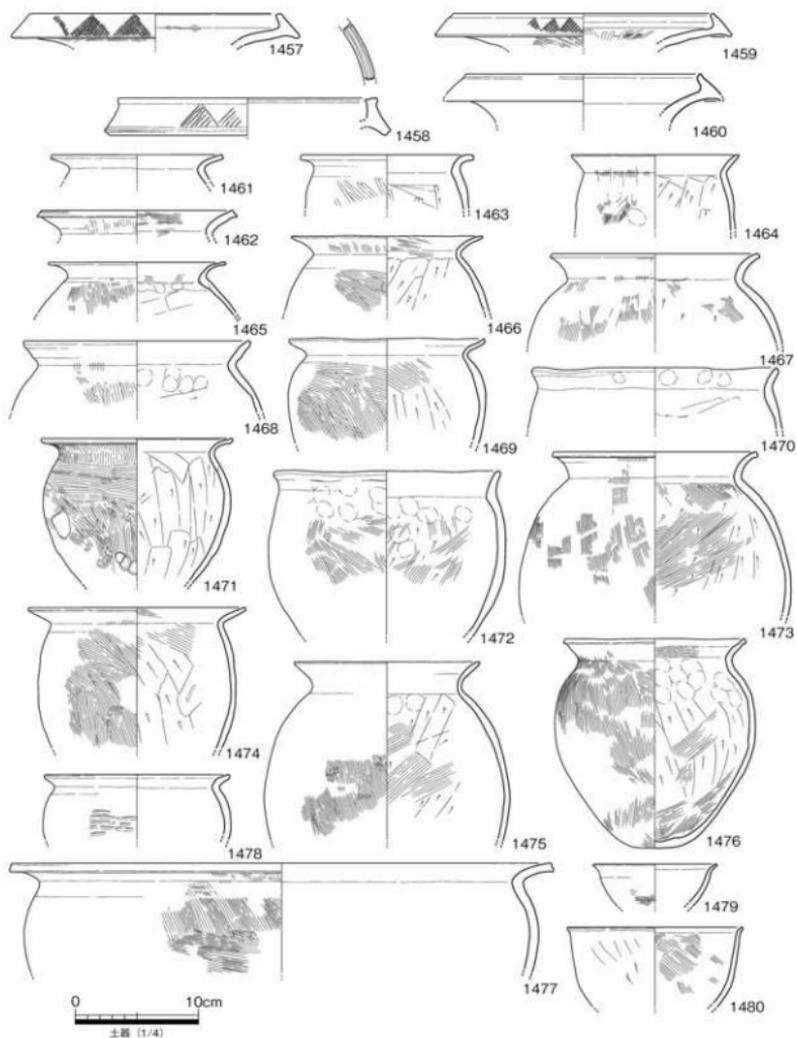
M72～74は鉄製品で、72が鉄鎌の先端と推察した。そのほかの2点は鉄器素材としての棒状鉄片である。

T54は碧玉製管玉である。長さ5.8mmで直径は2.0mmと細い。研磨痕は見られず鉄針で上下両側から穿孔したものと推察する。大賀分類のSe領域に入り、北陸系の玉であろう。T55は青緑色の酸化カリウムが多いカリガラス製の小玉である。

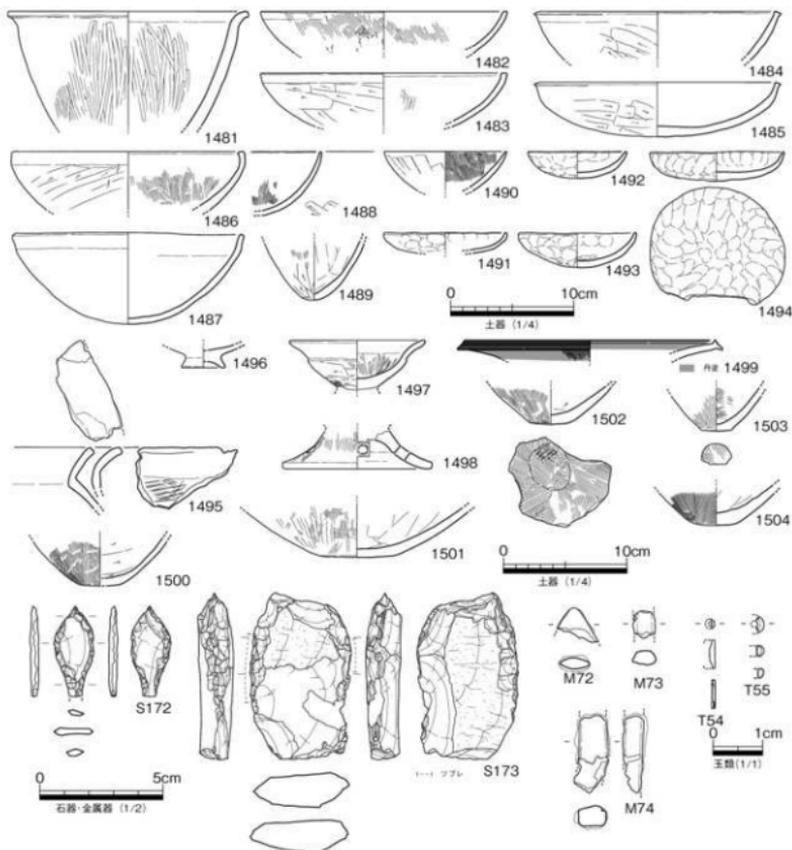
以上の出土遺物から、本建物は終末期古段階に廃絶した建物と判断した。

**(80) SH4254a**





第 187 図 竪穴建物 SH4161a 出土遺物実測図 2



第188図 竪穴建物 SH4161a 出土遺物実測図 3

4区北東隅で検出した多角形の竪穴建物である。終末期古段階のSH4016aと同中段階のSH4161aを切る。平面形状は端正な五角形で南北7.7m、東西約8mと規模が大きい。推定床面積は45.9㎡。壁溝は上下2層に分かれ、少なくとも1回は床面改修を行っている。支柱穴は5基でそのうち4基(SP4355a・SP4598a・SP4605a・SP4348a)を検出した。支柱穴列の外側に貼床によるベッド状遺構を設けている。また中央土坑は最上部のSK4359a、中位のSK4358a、下位のSK4572aの3面に分かれる。したがってさらに1回の床の改修を行ったことがわかる。出土遺物との対応関係は、図示したようにSK4358aで出土した1535の甕ほかの土器が中位面、その外の図化した土器が上位面(廃絶時)、1530の甕が唯一最下位の土坑SK4572から出土した土器である。そのほかの土器は埋土中出土の土器である。

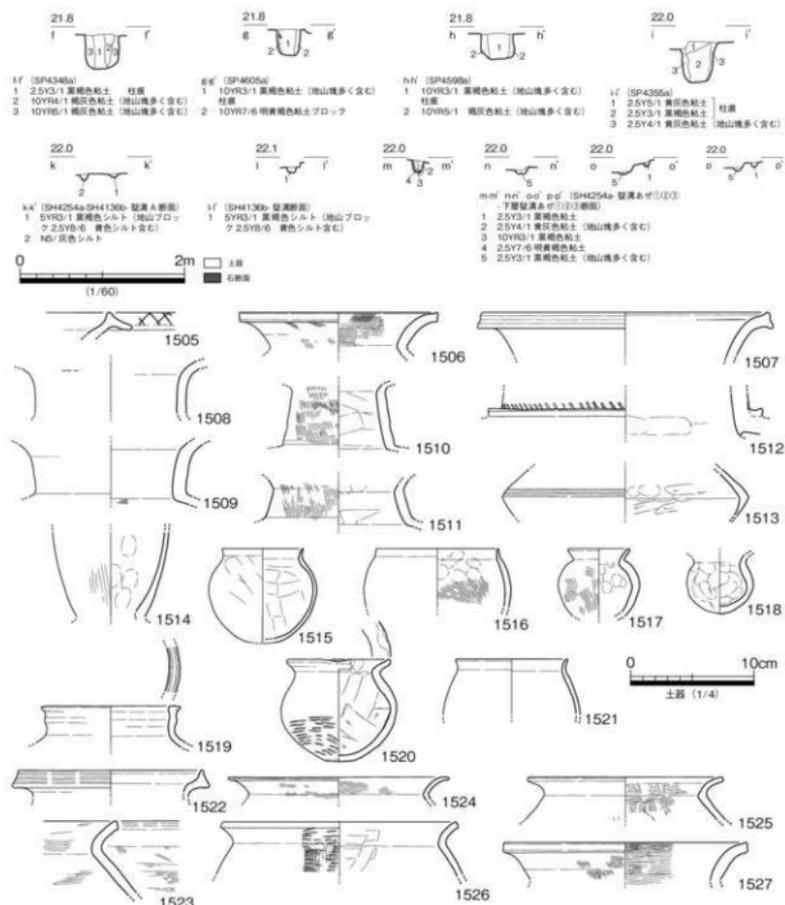
<出土遺物>



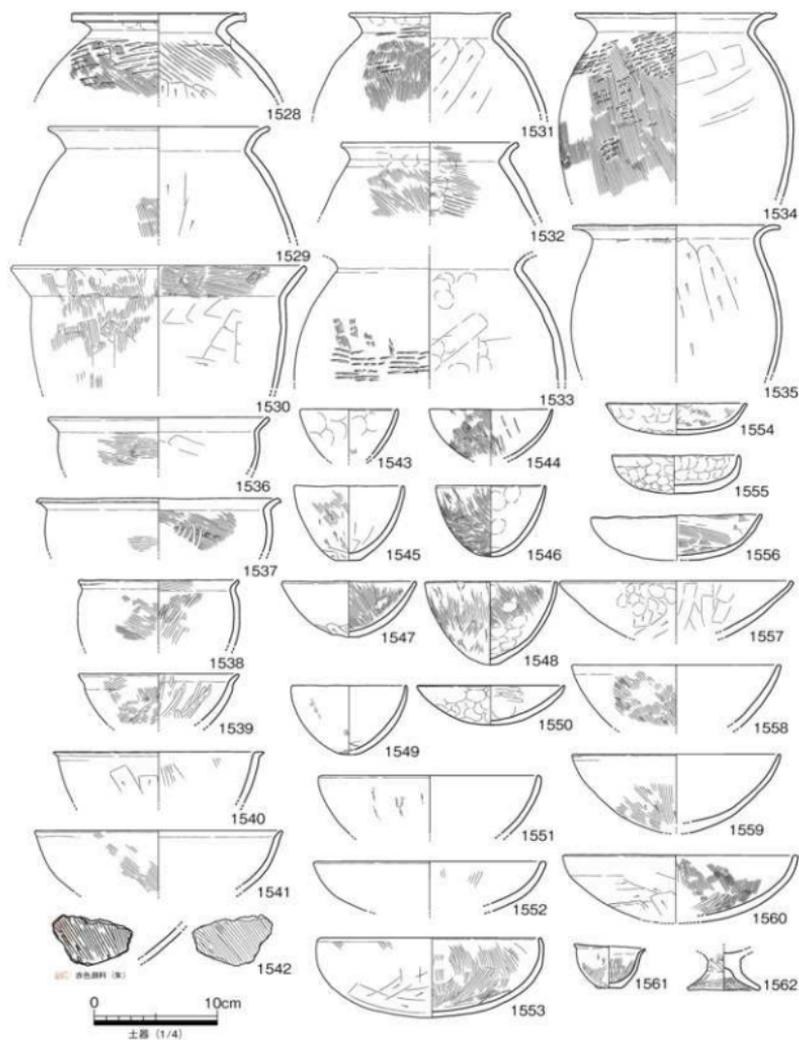
1505 は西部瀬戸内系の壺口縁部である。下方への拡張が顕著で斜格子文を施文する。1515～1518・1520・1521 は器高10cm未満の小形の壺・甕である。最終埋設時のベッド状遺構床面で出土するものが多い。甕は口縁部内面の稜線が明瞭で端部に向けて強く外反する形態のものが多い。1530 は下位出土の甕で口縁部が直線的に外傾して開く形態は特異で外地域の影響が考えられる。鉢は直口鉢の口縁端部が尖り気味に収まるものが多く、手づくねの皿状鉢 (1555) を含む。1566 は外面丹塗の裝飾高杯である。土器には多くの胎土 H 及び胎土 Hb のものが多い。

1572 は直径5cm以上の大形の土製の専用紡錘車である。1573 は土器片転用の土製円盤である。

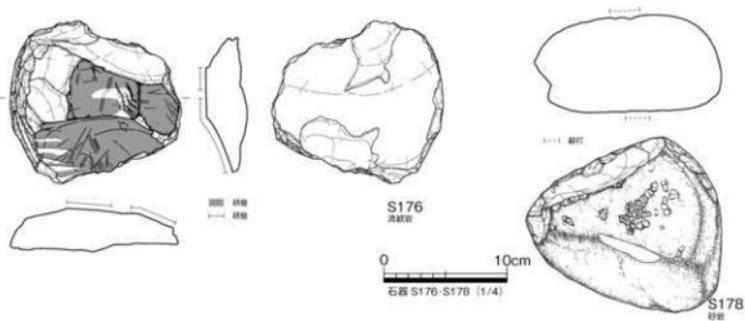
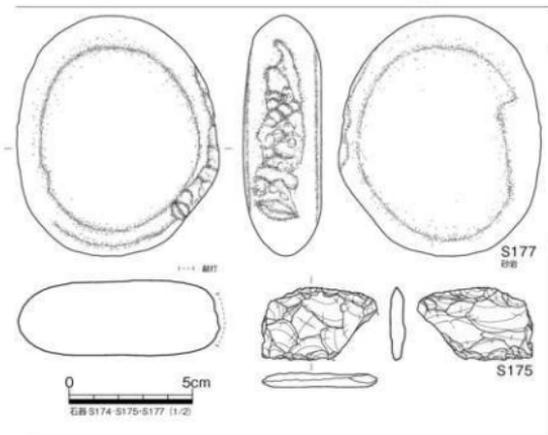
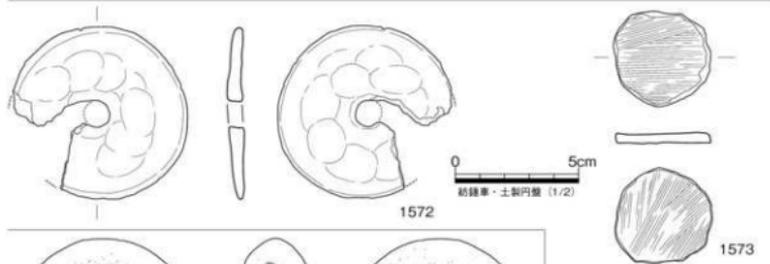
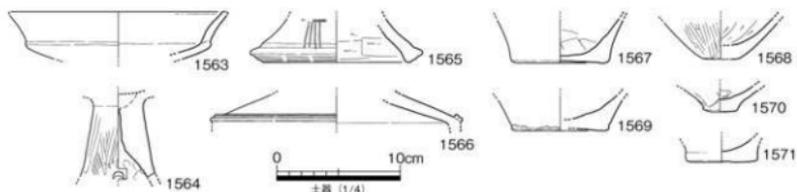
SI74・SI75 はサヌカイト製石器、SI77 は砂岩製叩き石である。SI76 は流紋岩の塊状剥片の片面に研



第190図 竪穴建物 SH4254a 出土遺物実測図1



第 191 図 竪穴建物 SH4254a 出土遺物実測図 2

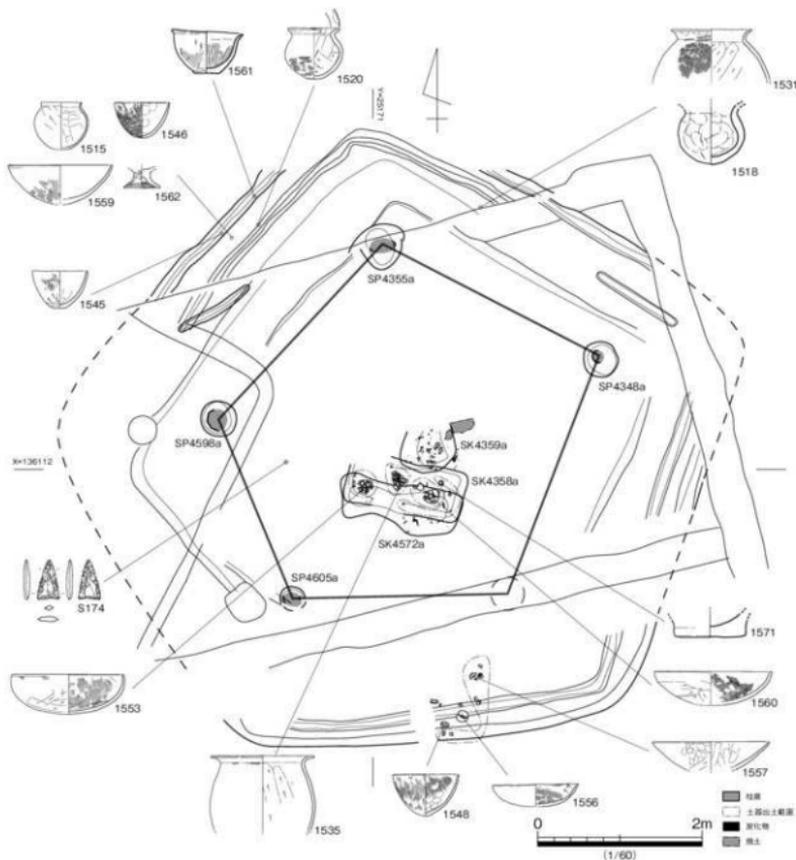


第192図 竪穴建物 SH4254a 出土遺物実測図3

磨が認められる砥石である。S178 は表裏の中央部敲打による凹みがある砂岩製台石である。

以上の出土遺物は終末期新段階に属するものが下限であることから、建物の廃絶時期は終末期新段階と判断した。

### (81) SH4258a



第193図 竪穴建物 SH4254a 出土状況図

多角形の堅穴建物である。推定床面積は20.7㎡。主柱穴は6基 (SP4327a・SP4574a・SP4306a・SP4318a・SP5013・SP4326a) で床面中央にやや深めの炉跡 SK4270aがある。SH4160aとSH4161aに大部分を切られ、建物形状を示す遺構は北側に壁溝が残る程度で、SH4161aの床面に痕跡程度に残る小溝下部は屋内間仕切溝と推察する。出土遺物は主柱穴と床面直上で出土したものが本建物に伴う。

<出土遺物>

1574・1575・S179は貼床及び上層出土の遺物である。1576～1578は主柱穴SP4270aで出土した土器である。1576の高杯脚は裾端部を拡張し外面下端に刺突文を施すもので後期前半に属す。1577は同じく高杯脚部で裾端部は面取りを行うが拡張はない。後期後半古段階に属す。1578は体部から下方へ突出気味の器形に安定した平底が付く。壺底部であろう。

T56は青緑色を呈し酸化カリウムが多いタイプのカリガラス製のガラス小玉である。器面に気泡が残る。S179は砂岩製砥石片である。表面遺存部全面に強い研磨が残る。研磨度は#20000に達する。

出土遺物から、本建物は後期後半古段階に廃絶した建物と判断した。

## (82) SH4289a

4区南東隅で検出した方形の堅穴建物である。主柱穴配置がやや菱形に近く、それに対応して平面形も菱形となる。推定床面積は22.3㎡。ほかの建物との切り合いはない。

主柱穴は4基と考えられ、そのうち3基 (SP4330a・SP4343a・SP4349a) を検出した。主柱穴列に沿って貼床土(断面9層)で構築したベッド状遺構の段がめぐる。中央土坑SK4313aは攪乱で大部分が損壊するが、炭化物層を含む。

<出土遺物>

1579～1581は壺である。1579は頸部がほぼ直立し口縁部が屈曲して外反する形態で内面は横位のヘラミガキで仕上げる。金雲母を多く含む胎土Hb。1580は複合口縁壺の口縁複合部片である。外面にC3類の鋸歯文を施す。1581は内傾するやや大形の細頸壺である。脚台が付く可能性が高い。

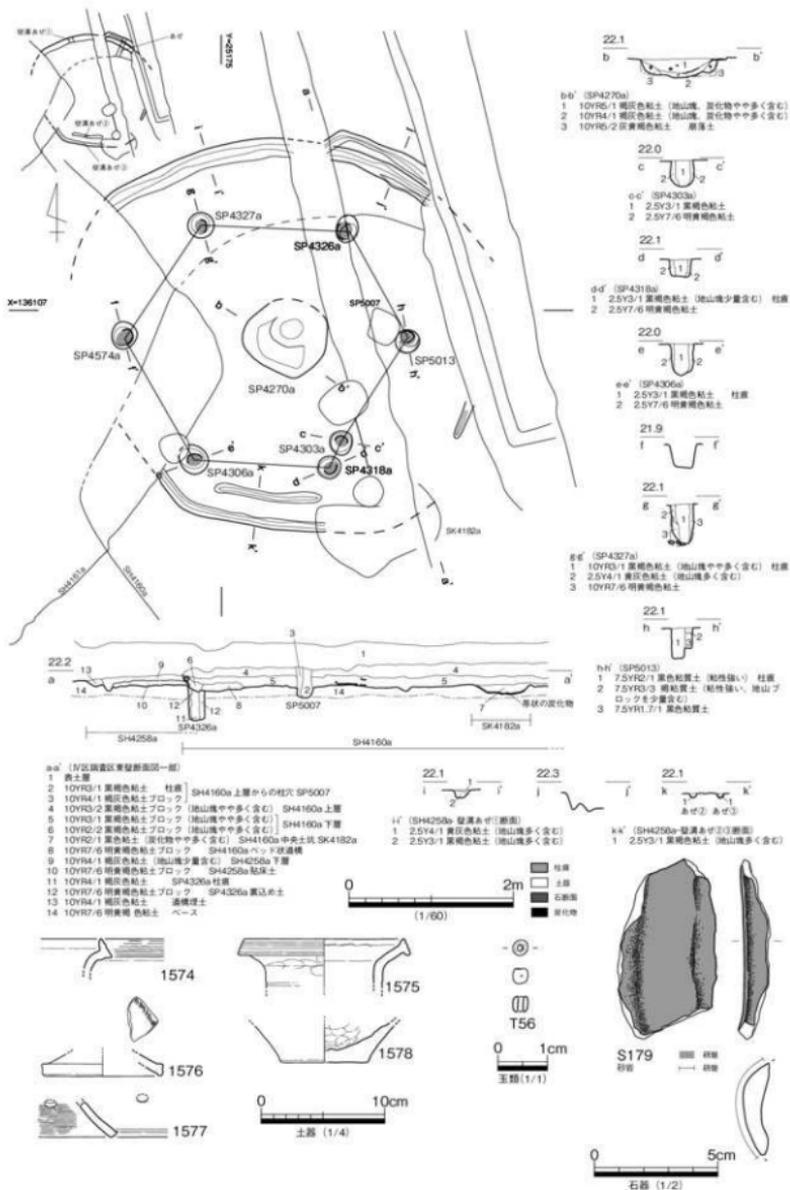
1582～1587は甕である。1582・1583は床面出土で口縁端部の面取りと口縁内面稜線があまり顕著でない。後期後半新段階に属す。1580は複合口縁壺の口縁複合部片である。外面にC3類の鋸歯文を施す。1581は内傾するやや大形の細頸壺である。脚台が付く可能性が高い。

1582～1586は口縁部が途中で強く外反するタイプだが、内面稜線は緩やかに後期後半新段階に属す。1582は胎土Hb。下層出土である。

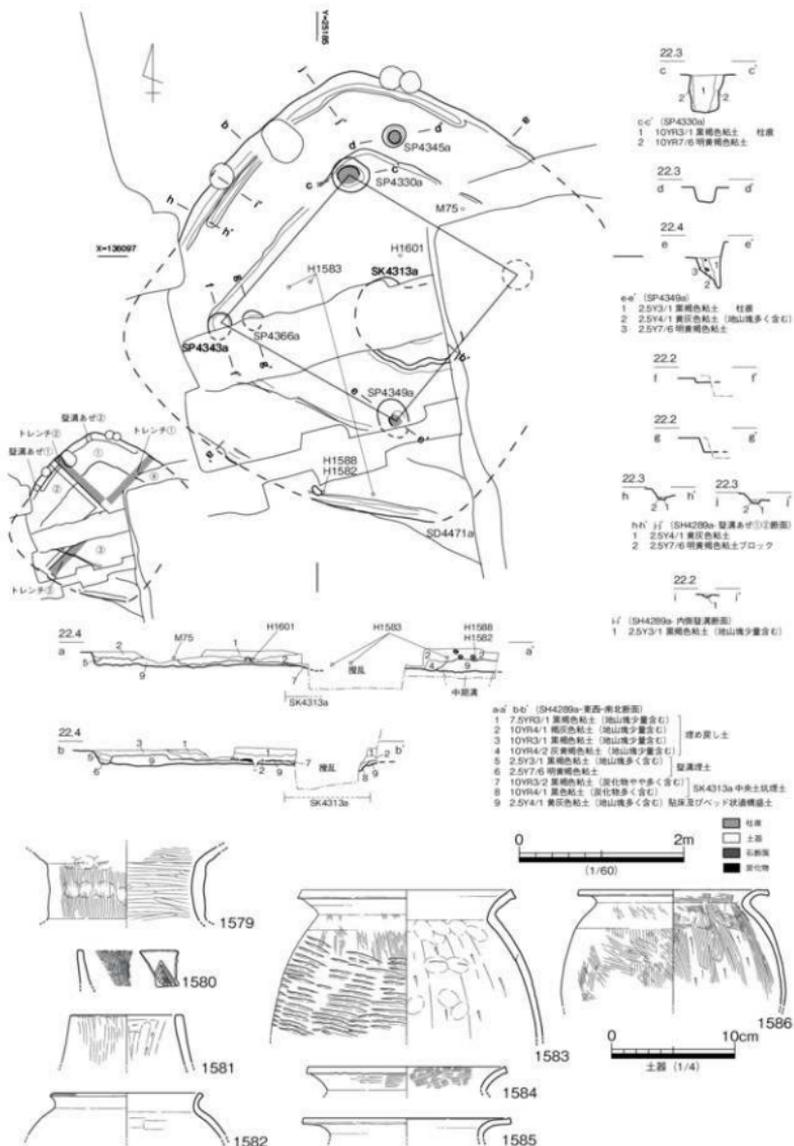
1588～1591は鉢である。1587は胎土Hb。1588・1589は底部が突出気味で矮小化した平底が付く。1590は手づくねの小形鉢である。前2者は後期後半古段階に属す。1591は底縁の稜線が緩くなった平底の大形鉢である。後期後半に属す。内面に赤色顔料(朱)が付着する。

1592～1595は高杯脚部である。1594は端部に凹線文を施し外面下端にヘラ描き羽状文を施し器台の可能性もある。1595は筒形の脚柱部が付属する高杯である。後期前半から後期後半の幅がある。1596～1598は器台とした、そのうち1596と1597は口縁が僅かに拡張するが凹線文を施さない単純化したもので後期後半古段階を下限とする。外2点は後期前半に属す。1599は下方拡張が長い備後系に属す。

S180は流紋岩製の砥石である。下端の折損面を除く各面に研磨痕が残る。a・b・c面は強い(#



第194図 竪穴建物 SH4258a 平・断面図 出土遺物実測図



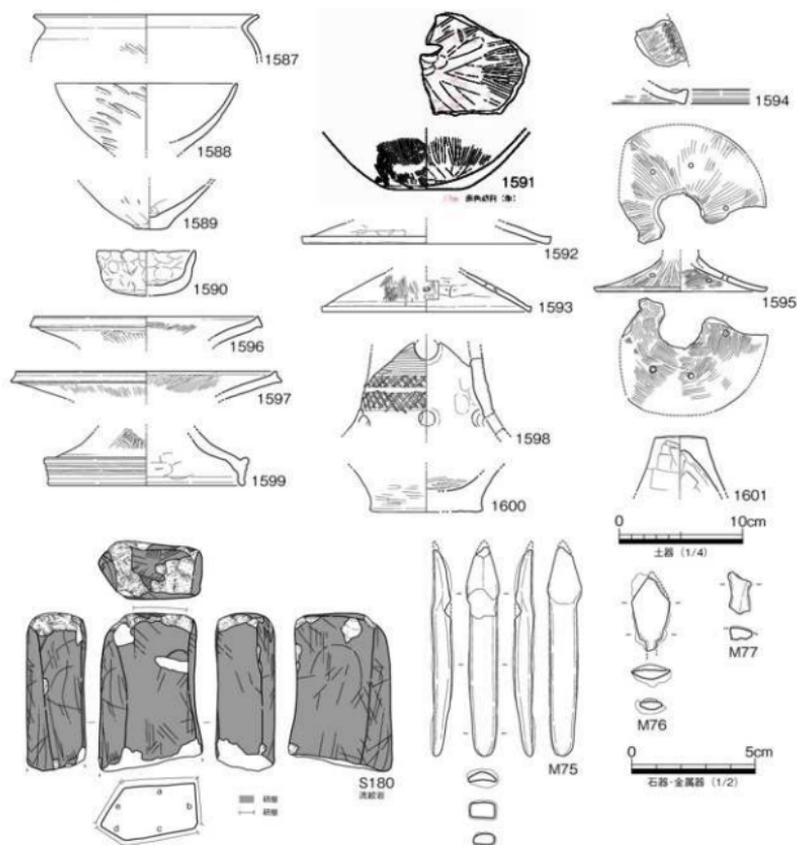
第195図 竪穴建物 SH4289a 平・断面図 出土遺物実測図1

4000) 研磨痕、d・e面と上面小口はやや強い(＃2000) 研磨痕である。

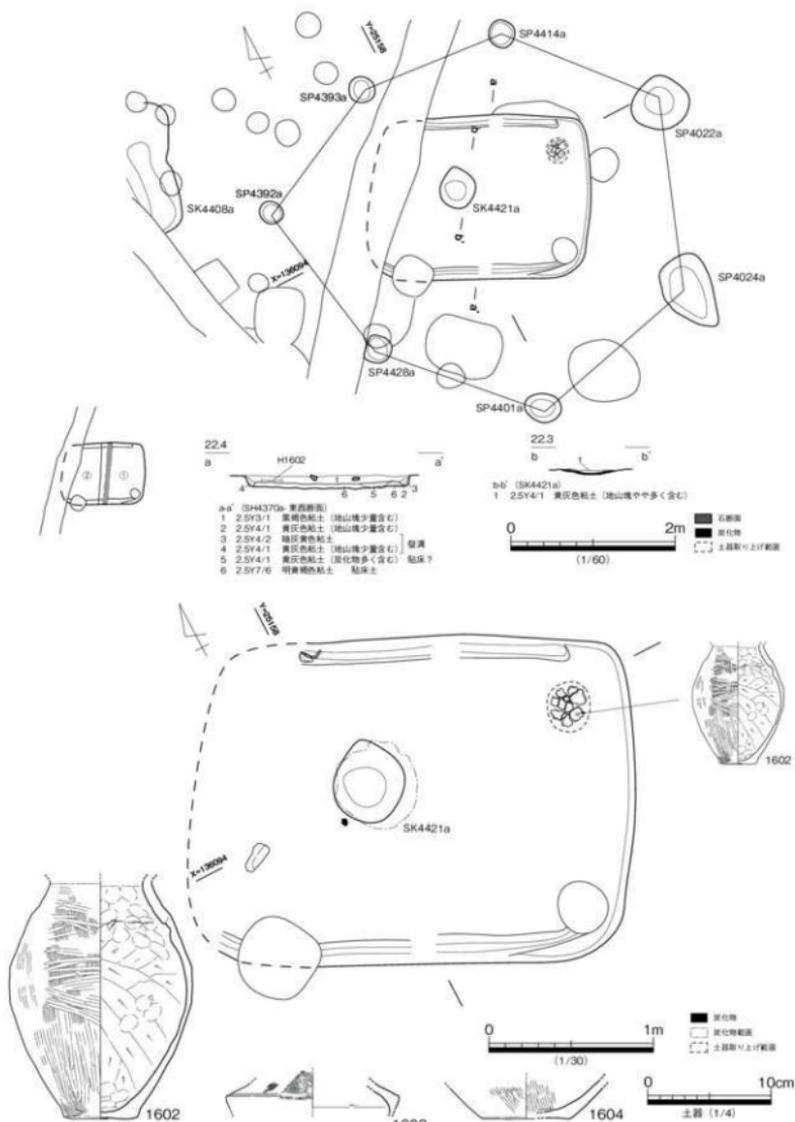
M75は全長8.5cmの完形の鉄製ヤリガンナである。柄は短めで先端刃部は蛇頭状に下膨れの三角形状を呈し、間があり、刃部には裏スキがある。M76は有茎圭頭式鉄鏝である。M77は棒状の鉄片とした。

以上の出土遺物より、後期後半新段階が本建物の廃絶時期と判断した。

(83) SH4370a



第196図 竪穴建物 SH4289a 出土遺物実測図2



第 197 図 竪穴建物 SH4370a 平・断面図 出土状況図

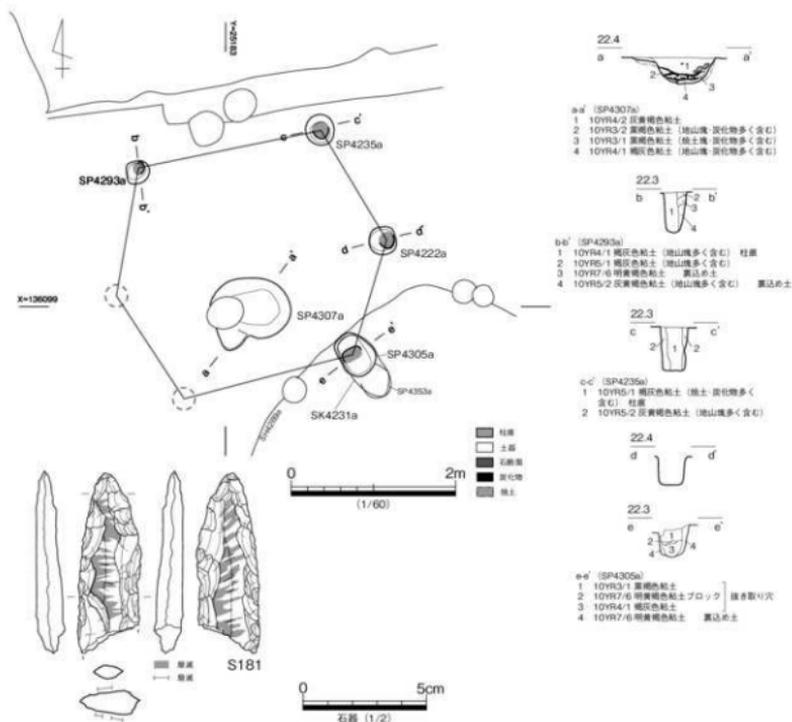
4区西南で検出した建物である。後期前半新段階の掘立柱建物SB4614aと重複する位置にあるが、掘り方と柱穴は切り合わない。長辺2.7m、短辺2.0mの長方形の掘り方を中心に、周囲の7基の柱穴と組み、半地下式の平地式建物を構成する。長方形部分の推定床面積は5.1㎡。掘り方の南北縁に間仕切り溝があり、中央に浅い土坑SK4421がある。土坑底には炭化物層がある。掘り方の西約2mに不定形土坑SK4408aがある。本建物の外周溝の一部と推察する。

ここでは掘り方内で出土した土器を報告する。床面で細身の体部の壺を検出した。1602は在地の胎土だが胴部が細身の形態から四国東南部の系譜をもつ壺と推察する。1603は櫛描縦線文を施文する高杯脚部である。口縁端部が下方に拡張する特徴は備中から備後の系譜で、後期前半新段階に相当する。

以上、建物の廃絶時期は後期前半新段階と判断した。

#### (84) SH4630a

4区南東部で検出した建物である。主柱穴列から復元しており、掘方がないので現状では平地式建物とする。柱穴は6基のうち4基(SP4293a・SP4235a・SP4222a・SP4305a)を検出した。中央やや南寄

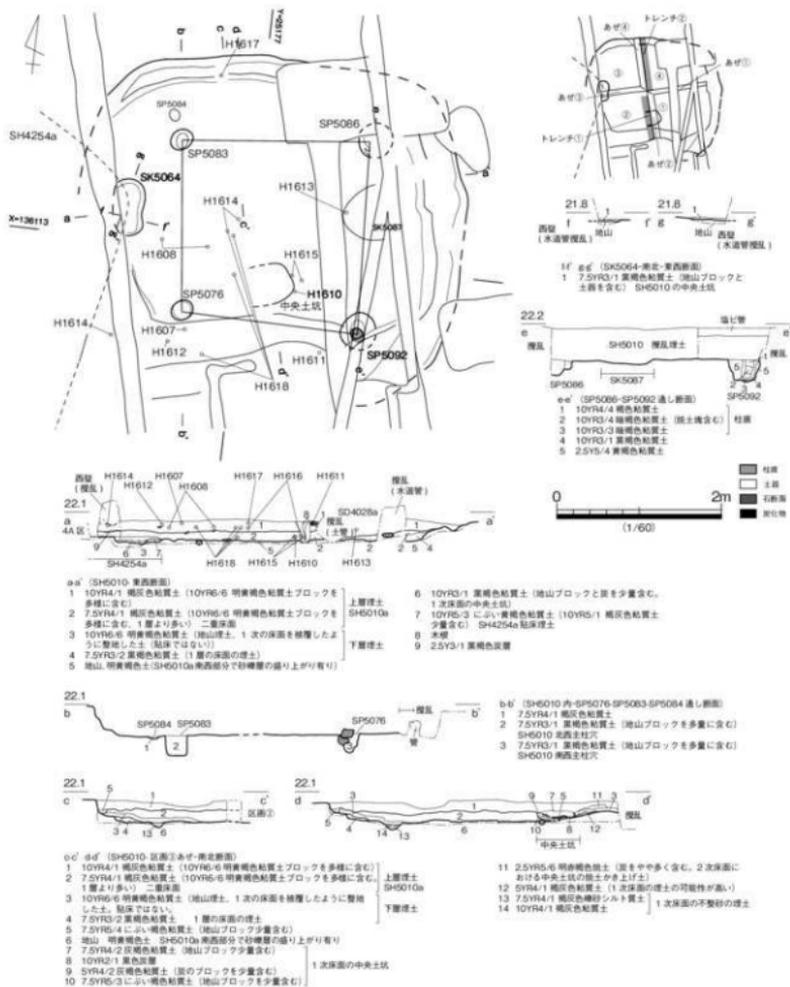


第198図 竪穴建物SH4630a平・断面図 出土遺物実測図

りに土坑 SP4307がある。SP4307は深い楕円形土坑で埋土中に複数の炭化物層があり、焼土塊が流入する等、炉としての特徴を備える。

土坑から打製石応丁を転用して銅線を再加工する途上で半折した打製石剣の先端片 (S181) が出土した。そのほかの遺物は土器小片のみで時期が不明瞭だが、石器から推定して中期後半と判断しておく。

(85) SH5010



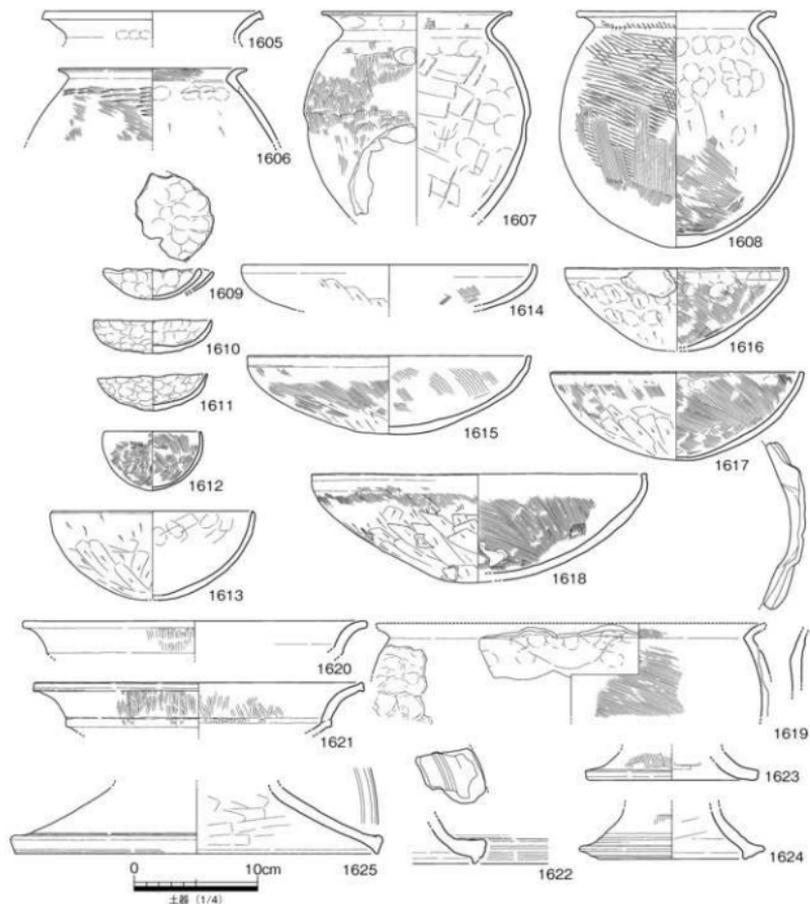
第199図 竪穴建物 SH5010 平・断面図

4区北東から5区にかけて検出した方形の竪穴建物である。終末期新段階のSH4254aに切られる。推定床面積は16.8㎡。支柱穴は4基（SP5083・SP5086・SP5092・SP5076）、床面西側に土坑SK5064が付属する。断面図で1回の床の貼り直しが確認できる。またdライン断面には上層床面に炭化物層を含む炉の存在が記録されている。

<出土遺物>

出土遺物は土器を中心に多数ある。多くは上層床面で出土したものである。

1605～1608は甕で、口縁内面稜線や胴部の球胴化が顕著で、口縁部も大きく外反するものが目立つ。1608の胴部は下半の膨らみが顕著で、終末期の特徴を備える。1609～1618は鉢である。手づくねの小



第200図 竪穴建物SH5010出土遺物実測図

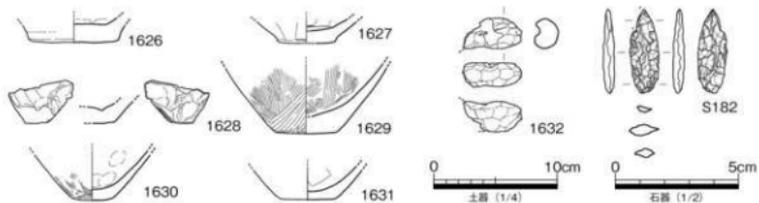
形鉢を含むことから終末期に下るものだが皿状の中形鉢の口縁部はすべて面取りしており、また体部下半は直線的に底部に至る特徴がある。終末期新段階には下らない。

1620～1625は高杯・器台で後期後半の混じりである。1632は土製製の把手、S182は凸基I式のサスカイト製打製石鏃である。

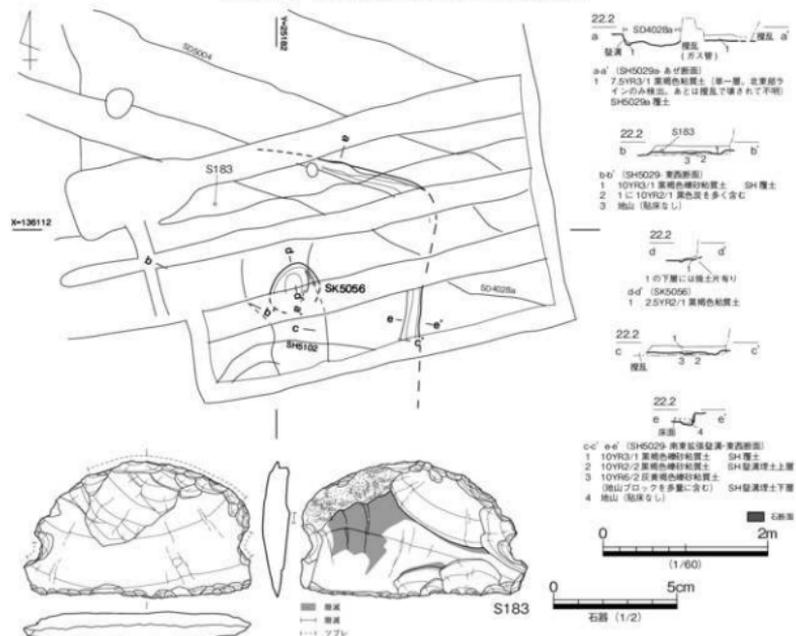
出土遺物から本建物は終末期古段階に廃絶した建物と判断した。

### (86) SH5029

5区南端で一部のみを検出した方形の竪穴建物である。攪乱と後世の溝に切られ、遺存状態はよくない。中央土坑SK5056からは焼土が出土したが、炭化物は認められない。



第201図 竪穴建物SH5010出土遺物実測図

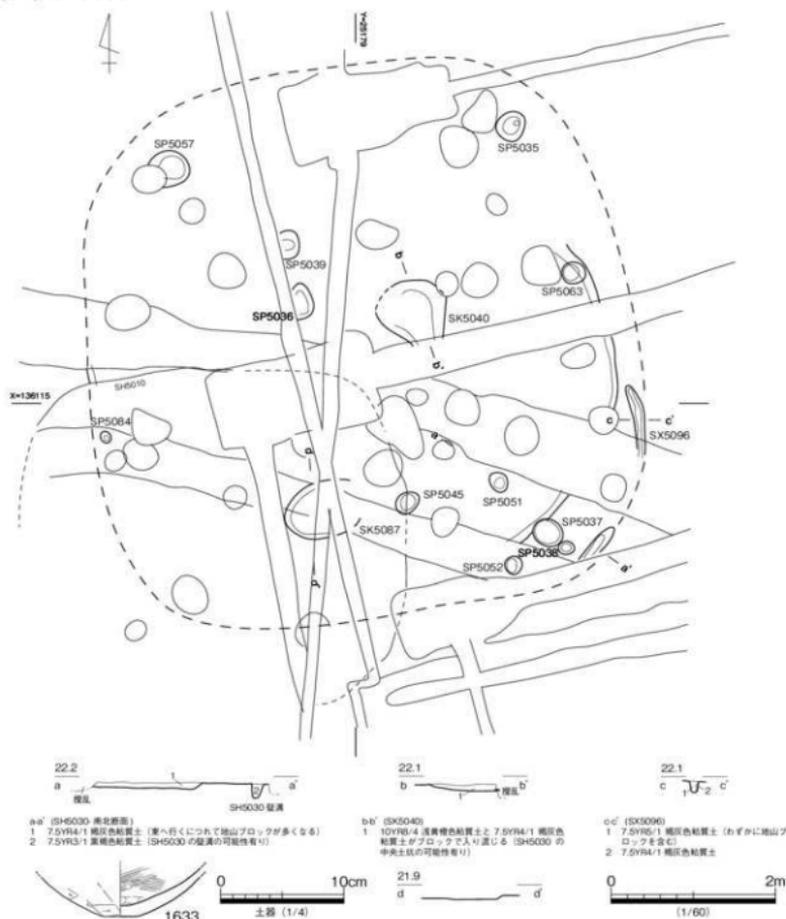


第202図 竪穴建物SH5029平・断面図 出土遺物実測図

床面からサヌカイト製の打製石庖丁が出土した。S183は背部が極端に丸く、刃部が直線であり、弥生時代中期の盛行期の打製石庖丁とは形状が異なる。後期に残る打製石庖丁と判断した。刃部は再調整のため磨滅は残らないが、素材面には弱く磨滅が認められることから、実際にイネ科作物の収穫に使用されたものである。

他に出土遺物がなく、詳細な時期は不明だが、石庖丁の形状から弥生時代後期前半に廃絶された建物と判断しておく。

## (87) SH5030

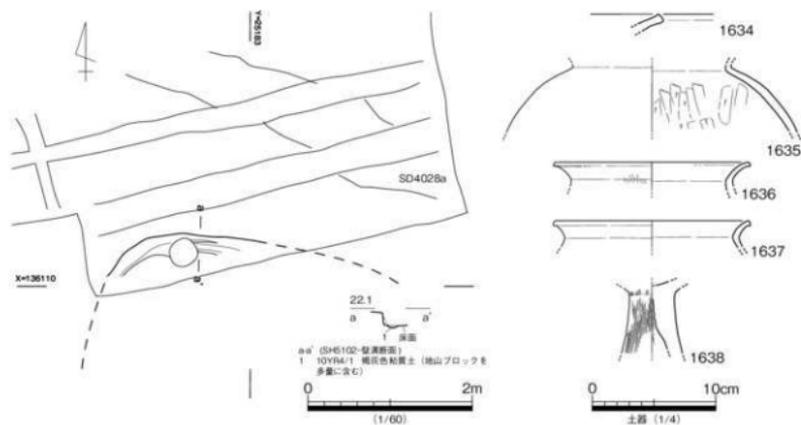


第203図 竪穴建物 SH5030 平・断面図 出土遺物実測図

5区中央付近で想定した建物である。一部に壁溝が残るが極めて浅く、平地式に近い建物と判断する。床面相当範囲には柱穴が多数あり、主柱穴を抽出するのは困難である。想定範囲においてSH5010と重複する。埋土中から後期後半の鉢底部片が出土した。建物の廃絶時期を後期後半とした。

(88) SH5102

5区南東隅で検出した隅丸方形と推定できる竪穴建物である。掘方の大半が調査区外にある。出土遺物は後期後半新段階の土器が出土しており、現時点ではこれを廃絶時期を示すと判断した。



第204図 竪穴建物SH5102平・断面図 出土遺物実測図